

創建

そうこん

2009・12・10 VOL.44 NO.3 (通巻131号)

巻頭言／濱田幸雄	・ 1
卒業生の活躍紹介	・ 2～3
設計活動の紹介	・ 4
平成21年度公務員内定者の報告	・ 5
構造設計インターンシップ体験報告	・ 6
スタンフォード大学からの便り 第2便	・ 7
第13回 J I A 東北建築学生賞受賞報告	・ 8
施工現場見学会・高校コンベ報告・新任の先生	・ 9
第52回日本大学工学部学術研究報告会	・ 10
学術論文・学会発表	・ 11
教室ニュース	・ 12

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

2009年11月9日、ベルリンの壁が崩壊してちょうど20年が経った。日本のメディアの扱いはそれほど大きなものではなかったように感じたが、実際に壁を越えた経験を持つ私にとっては、月日が流れるほど、この壁の崩壊の意味は大きくなっている。

大学院2年の夏、私は国際学会での発表の機会を与えられた。海外旅行は初めてのことであり、テクニカルツアーを組んでいただき、ドイツ、フランスの大学をはじめとする研究機関を訪問した。その中で、フランクフルトからプロペラ機に乗って西ベルリンに入り、日帰り観光ツアーで東ベルリンを訪問した。西ベルリンで東西冷戦のレクチャーを受け、実際に鉄の壁を見たときの記憶は鮮明である。コンクリートの塀に、白い花の束が立てかけられていた。一週間ほど前、射殺された人に手向けられたものという説明を受けた。翌日、観光ツアーで西から東に入ったが、国境線を越えると黒い皮ジャンの痩せた女性がバスに乗り込み、写真撮影は許可した場所のみで行うことと、低い声が車内の隅々まで伝わった。雨模様の天気、商品のないガラスケースが今も目の前に浮かんでくる。

永遠に存在すると思われたこの壁があっけなく崩壊したのは、1989年11月9日である。正確には、この日は海外旅行自由化法案が発表された日であり、私たちがテレビで目にする光景、つまり人々が壁によじ登り、鉄製ハンマーで固いコンクリートの塊をたたくのは翌10日のことである。

ではどうして壁は壊れたのか。各種報道を総合すれば、ゴルバチョフによるペレストロイカ政策が推進された結果、東欧諸国においても民主化の流れが確定的となり、1989年ポーランドで自由選挙が実施された。東

ドイツ国内においても、民主化と長期政権への不満を示す大規模なデモが発生し、政権の根底が揺すられたところに、思わぬ偶然が最後の引き金を引いたといったところだろうが、本当のところは分からない。冷戦の象徴、越えられないものの代名詞であった壁の崩壊後、世界の予想に反して、東西ドイツは1990年10月3日に正式に統一された。

昨年の7月、私は再びベルリンを訪れる機会を得た。あれほど遠く感じたブランデンブルク門からタワーまでは、歩いて30分ほどの距離であった。陽光に輝く街路樹の道を戻り、ポツダム広場に向かった。ベルリンフィルのコンサートホールがまず視界に入ってくる。黄土色の外壁は以前のまま変わりなく、緊張感だけを味わったコンサートが蘇ってくる。

ベルリンの壁

教授 濱田 幸雄

ポツダム広場には、再開発の目玉として建設され、ドイツ現代建築の最高峰として注目を浴びるソニーセンターがあり、観光名所のひとつとなっている。あの壁はどこにいったのか。近くを歩き回ると、地下鉄駅の入り口近くに数点のピースが残っていた。

人間社会は予想できないことで成り立っている。昨年9月のリーマンショック以来、世界は同時不況に陥り、日本が受けた影響は大きいようである。それは、来春の大卒就職内定率が6割台ということからも容易に推定される。

さらに、あっという間に政権交代が実現し、コンクリートから人へ、

のキャッチコピーが世に受けている。建築に係る私たちに未来はあるのだろうか、就職はできるのだろうか。こういう時代だからこそ、求められる人物像があると声を大きくして言いたい。第1は、理想と強い責任感を併せ持つ人であろう。日本の著名な建築家が模型作りのアルバイトを募ったところ、多くの学生がやってきたが、2日目には断わりもなく数人が来なくなったという。これらの学生が特別な存在なのではなく、一定の割合を占めるとすれば、今日の多くの学生が就職浪人となっても仕方ないと思える。

第2は、自由人である技術者であろう。大学の講義で、社会で役に立ちそうもないつまらない話をなぜ聞かなければならないのか。それは、抽象的な思考能力を持つ人材を育てたいからである。現実目の前にあることだけを判断材料としたのでは犬や猫と何ら変わりはない。多くの知識を持つ人は、無い人より自由な発想ができるはずである。何が起るか予想できない社会で頼りになるのは、固定観念に囚われず自由な発想ができる人だと思う。

蛇足ついでにもうひとつ。ベルリンの壁というと、私は「ベルリン・天使の詩」という映画を思い出す。1987年公開のこの映画は、カンヌ映画祭監督賞を始めとする各種映画賞を獲得しているので、見た方も多いと思う。ピーター・フォークの演技力もさることながら、ベルリンの壁がなければ、この映画は成立しなかったのではないだろうか。未来感星ザルドスでも、日本の首都高速が重要なメッセージを放っている。建築物、都市空間は現在だけのものではなく、未来や時空を映す鏡でもある。固定観念で対応できるはずがない。

卒業生の活躍紹介

サービス業・意匠設計職 もの創り

岸 賢



私が建築というものを意識したのは小学生の頃でした。自宅の新築で木造住宅の現場を頻繁に見にいき、建物が出来上がっていく過程をみて、その大工さんの匠の技に惹かれました。その思いは高校進学の時にも変わらず工業高校へ進学し、そこから建築を学ぶことが始まりました。自分が惹かれたものを学ぶことはたいへんに有意義に感じ、充実した高校生活を送りました。そしてさらに知識を増やすべく日大工学部の建築学部へと進み、ここでも益々建築に興味を抱き、建築の設計という職業に惹かれていきました。

大学卒業後、建築家アントニン・レーモンドの創設した事務所に入社することができ、現在まで在籍しています。日大の先輩も含め多くの先輩方のご指導のもと、数多くまた多種多様な用途の建築の設計に携わりました。しかし、当然ながら同じ条件のものではなく、敷地条件や数多くの要望があり、設計をまとめていくのは大変な作業です。それだけに多くの知識が必要とされ、それを習得していくには多くの時間と努力が必要だったのは言うまでもありませんが、でも苦しいだけではなく楽しみもあります。もともと木造建築にあこがれて建築をはじめたので、木造建築の案件には率先して担当を希望し、レーモンドのデザインである丸太の洋小屋組みをデザインに取り入れた設計を数件担当しました。自分の描いた設計図が実際に建物として形になり、でき上がってくるものを見ていくのは、なんとも幸せな職業だと思います。中でも木造の別荘の設計では、照明までデザインしトータルのまとめる経験をしました。重要な部分は原寸図を描いたり、原寸模型を作成したりして、デザインや大きさのバランスを確認するということを何度も重ねることが大切だということも学びました。昨今は厳しい時代になりスピード社会になって、このような作業をする時間が少なくなってきましたが、まず使う人のことを考え、そしてそこに美しさとバランスを兼ね備えた建築を創造することを目指し、さらに努力していきたいと思っています。うまくいかなかったりすることもあります。努力すればそこにまた新しいアイデアが生まれてくると思っています。

(きし まさる)

桜の木のある家（軽井沢）



略歴

1988年 建築学科卒業（若井研究室）
1988年 株式会社レーモンド設計事務所 入社

建設業・構造設計職 見えてくるもの

渡辺 正光

「地図に残る仕事」。メディアを通じて一度は聞いたことのあるフレーズではないですか？この言葉から建築学科専攻のみなさんは何を想像しますか？自分の携わった建物が街のランドマークになる。設計、施工、監理、係り方は違っても、建物の建築／建設に携わり、街を、都市を創造していく。そう考えるとゾクゾクしませんか？私もスケールの大きな仕事に憧れ、いつかはなどと思い建築学科に進みました。現在は原子力発電施設の設計に携わっています。基本的には構造設計が主ですが、研究開発や解析に特化した業務など多岐にわたります。

一時期、飛来物からの防護設計の研究に携わる機会がありました。“9.11”2001年に起きたアメリカ同時多発テロによる世界貿易センタービルの光景は未だに思い出されますが、原子力の分野ではそれよりも前から、飛来物に対する検討を行っていました。担当した当時、9.11のような光景は頭に浮かばず、あまりに現実から乖離した発想という思いがありました。この衝突荷重に対して建物はどうなるのか？どのくらいの厚さであれば大丈夫なのか？破壊形状は？など、解析によりあらゆる事象を検討評価しました。この業務を通して“もしも“の発想を設計に取り入れることでより安全・安心な建物になるということ。勿論、全ての建物にこの考えを適用するのは難しいですが、建物の用途・立地環境そして重要度など、総合的に判断して条件を決定することで、より良い設計につながるということが見えてきました。

ご存知のように、地震の多い日本では、設計用外力として地震力を考慮します。設計手法の1つとして地震応答解析を用いて部材断面を検討しますが、この時、建物に入力される地震動は全国同じもので検討すべきでしょうか？敷地には地層構成や近傍の断層の有無など、それぞれ固有の特性があります。自ずとその敷地の建物は、その特性に影響された地震動を受けるはず。こんな考えから見えてくるのは、敷地特有の地震を想定することが安全・安心な建物の設計につながるということです。

設計に限らず、ものの本質を見極めることから、工夫、問題の解決・回避へとつながります。経験を重ねていくうちに見えてくるものがあります。常に“見つける”を意識し、何かを感じ取ってください。きっと何か“見えてくる”はずです。

(わたなべ まさみつ)

セキュリティショーにて



略歴

1991年 博士前期課程建築学専攻修了（千葉研究室）
1991年 大成建設株式会社 入社

建設業・施工管理職

もの造りと建築のすばらしさ

小林 章浩



学生の時から漠然と建物を造る現場に一番近くで働けるゼネコンを希望していた私は入社後、1ヶ月の研修を経て即希望の現場管理として配属になりました。配属初日に職人さんに呼び止められ、鉄骨柱の最下部のレベルを見るよう言われ、不慣れながら職人さんに要点を聞きながら行ったのを今でも覚えています。ゼネコンのユニフォームを着ていれば何年生であっても現場を管理する者として扱われ、それに答える責任の重さを感じました。

我々現場マンの守備は広く、ある時は発注者と打合せし、設計事務所とは質疑応答を繰り返し、実際に建物を造るための図面を纏め上げ、その意図を現場に反映させるために各専門業者と打合せし指示を出し、最終的に現地に要求する建物を実現させるという途方もない仕事をしています。

建物が完成後、我々現場管理者から作業員までもが『あそこは私がやった建物だ』と言う。それは、立場は違うがそれぞれの専門的な役割の中で試行錯誤し、もの造りに真剣に取り組んだから言えるのだと思います。

何を造るかは誰がやっても結果は変わらないが、どう造るかは現場に配属されたスタッフによって様々に変化します。そこに現場マンの一番の醍醐味ともの造りの面白さがあります。時には若手の意見が固定観念にとらわれず採用される場合もあります。

建物を造る上で足場やクレーン、エレベーター等の仮設物が必要になり、我々現場マンは如何に少ない仮設の中で効率よくもの造りができないか、日々検討を繰り返し最良の計画を考えます。しかし、建物ができてくるにしたがって仮設は不要なものになる悲しい定めを持っています。そして後に残るのは発注者・設計事務所のニーズに沿った建物と我々の満足感だけです。

建物は現場にたずさわる全ての人の意識の結晶だと考えます。

昨今、技術の進歩に伴って構造的にも意匠的にも新しい工法・奇抜な建物が増えています。好奇心と探究心を持ち続け、未知の建物に対しても皆さんももの造りを通して建築のすばらしさを味わってもらいたいと思います。

(こばやし あきひろ)

都内 某新築現場



略歴

1989年 博士前期課程建築学専攻修了（黒田研究室）
1989年 株式会社大林組 入社

製造業・研究開発職

コンクリートをデザインする

宮川 美穂



私は、建築家になろうと建築学科に進みましたが、大学での建築材料の授業や実験で興味を持ち、建築化学研究室（大濱・出村研究室）で卒業研究を行ないました。そのときはコンクリートの耐久性に関する調査と試験方法の検討を行ないましたが、その後も材料の研究をしたいと思い大学院へ進み、産業副産物を使用したコンクリートの実験・研究を行いました。材料の研究分野は募集が少なく、就職先探しは困難を極めました。が、縁あって今の会社に入社しました。

今年で勤めて8年目になりますが、現在の仕事は、コンクリート用化学混和剤の研究・開発です。この化学混和剤とは、コンクリートを練混ぜるとき使用する材料である水、セメント、砂および砂利と一緒に使用する液体（混和剤）で、マンション、橋、トンネル、道路など様々なコンクリート構造物で使用されています。この混和剤には、色々な種類があり、コンクリートを軟らかくしたり、硬化時間を調整したり、強度をコントロールすることが可能で、どのようなコンクリートも用途に応じて製造することができます。

学生時代は、コンクリートにある材料を添加して、硬化したコンクリートの性状を比較・評価するものが主でしたが、入社してからは、化学的な構造がわかっている材料を何種類か使用して、コンクリートが硬化する前の軟らかい状態を評価したり、どのように硬化するかをデザインしたり、硬化後のコンクリートがどのようになるかを評価しています。

最近の研究は、コンクリートを練ってから4～5時間程度軟らかい状態を保ち、24時間後に強度が出る混和剤の開発でした。これは、単に軟らかくするのではなく、4時間後には最初の軟らかさの約85%になるようにデザインすることが条件でした。これは大変難しい技術で、特殊なコンクリートだったため、最初の半年は失敗の連続で、考えすぎて、夜、夢の中で実験をするぐらいでした。実験をしていたある日、いまだ使用していなかった理論上使っても意味のないように思われる材料で実験をしたら1種類だけ成功するものが見つかりました。それが糸口となり、現在では混和剤として販売されています。その実験で1種類の貴重な糸口が見つかったときは、開発にかかった2年の長さを忘れるぐらい嬉しかったことが忘れられません。

これから就職・進学をする人は、興味があると思った分野を見つけたら、一度経験してみたいかですか？どんな形でもいいので、興味がある分野に触れることで、新しい何かを発見できるかもしれません。今を最大限に活用して、自分なりの答えをがんばって見つけてください。

(みやかわ みほ)

新しい混和剤を使った
コンクリートの試験

略歴

1999年 建築学科卒業（大濱・出村研究室）
1999年 九州大学大学院人間環境学府修士課程修了
2002年 グレースケミカルズ株式会社 入社

設計活動の紹介

非常勤講師として設計指導を担当されている上西明先生（担当科目：4年次生前期「建築設計」）と、平野由朗先生（担当科目：2年次生後期「建築設計演習Ⅱ」）に、ご自身や設計活動の紹介を兼ねて、建築を学ぶ学生へのメッセージを寄稿いただきました。

山に登ろう

非常勤講師 上西 明

建築設計を始める時には、敷地とプログラムが与条件としてあります。設計は、それらと条件を分析することからスタートします。（時には、そのプログラムが、そこに建てられるべき建築として適当かどうか、考えないといけません。）そして、その諸室やスペースのつながり方を考えることになります。部分部分をとってみると、建築設計は、かなり合理的に考えることもできますし、また理詰めで詰めていくことも必要です。とはいえ、そのような部分を積み重ねていっても、建築の全体像が現われるものではありません。総合化のプロセスは、設計にとってはなくてはならないものです。建築設計をすることの楽しさ（同時にむづかしさでもあります）は、ゼロから出発して、その全体像を描くことにあります。

そのような全体像をつくるトレーニングが、「建築設計」の授業です。ですから、それは将来設計を目指す学生にはもちろん、施工の仕事を目指す学生にも、有用だと思います。自分が、一体どのような全体像を目指して工事をしているか、また設計者が何を意図してデザインしているのかを知るためです。またゼロから出発して全体像をつくるトレーニングは、建築以外の仕事につくことになる学生にとっても、有用だと思います。何が課題点であるかを見いだして、そのためには何を解かないといけなさを考え、自分の考えた全体像の案を図化し、プレゼンテーションして他者を説得するということは、どの仕事でも役に立つことだと考えています。

おそらく大学へ入るまで、そのような全体像をつくるトレーニングをすることは稀有だと思います。また大学でも、学部や学科が違っていると、そのようなトレーニングを受ける機会もないかもしれません。ですから「建築設計」の時間を大事にしたいと思います。良いものをたくさん見て何が良いかを考えることは、総合化のプロセスに役に立ちます。設計のエスキスで特徴的なのは、スケッチでも模型でも、多くの材料を持ってくる学生の方が、より多くのコメントができるということです。「全体像をつくること」を、登山だと考えると、そのルートは一つではありません。それぞれの学生に向けた登攀ルートがあります。一番向いた登り方を皆さんと一緒に発見していきたいと思っています。

略歴

1982年 東京大学工学部建築学科卒業

1984年 東京大学大学院修士課程修了

1984年～1997年 横総合計画事務所勤務

*幕張メッセ、名取市文化会館（宮城県）などを担当

1998年 上西建築都市設計事務所設立

1997年～2007年 工学院大学建築学科非常勤講師

2006年～ 日本大学工学部建築学科非常勤講師

2008年～ 共立女子大学建築・デザイン学科非常勤講師

日本建築学会 建築計画委員会文化施設小委員会 主査

日本建築家協会全国学生卒業設計コンクール実行委員会 委員



素材から見えること

非常勤講師 平野 由朗

最近ひよんなきっかけから、茶室を設計することになった。

この茶室はいわゆる「現代の茶室」ではなく、千家流の伝統的形式のものであった。学部を卒業した後は、アメリカにおいて脱構築論者の下で教育を受け、前職においては、いわゆる外タレ建築家がいかに日本で継続的に輸入建築を成立させていったか、という流れの中に身を置いていた。そうした者にとってはいささか奇妙な巡り合わせに思えた。

こうした数寄屋といわれるものが立ち上がる場合、我々が現代建築に使用している材料とは当然違って来る。それは材料の仕様ということだけでなく、その背後にある「モノの見方の伝統」さえ違うのである。

今回は3畳台目において、さるすべりの変木を中柱に使用した。現場に入り、銘木屋といわれる所で値段の話になった。すると「使う場所によって値段が違う」そうである。いったいどういったことか。工場生産品においては、その製品をどの部位に使うと値段を左右するものではない。左右する要因は、資本の論理及び合理である。ある意味、ワカリヤスイのである。木とは本来まっすぐ上に成長するものであるから、くねくね曲がった変木はいわば規格外の異端児である。異端であるがゆえに高い貨幣に変換される。しかしこの異端も、使う場所によっては安い値段がついてしまう、というわけだ。社会における人間の存在そのものである。一方工場製品は、素材の段階では均質である。それをどう昇華させたかが問われるのである。根っからの異端児は「いない」のである。そして「使いにくい」のである。

思えば異端児という言葉も久しく耳にしない。隙間をぬう異端であることの価値が減少したようにも思える。飽和な社会においては異端であるよりも、冷やかに、そして冷静に社会を見る姿勢の方が大切ということか。飽和な中で建築の置かれる立場も変化している。建築の守備範囲が極めて広がったようである。環境問題やストックの問題は言うまでもないが、建築を考える上で拠り所となる項目はさらに多岐にわたってきたと思う。元来の建築においてタブーとされていた領域に「手を染める」こと、それは建築の領域から逸脱するのではなく、建築の守備範囲を広げることなのである。もしかしたらもっと前から、手を染めてなくてはならなかったのかもしれない。我々は、「建築からみた社会」でなく、「社会から見た社会」を相手にしなくてはならないと思う。

3 畳台目手前座



略歴

1996年 南カリフォルニア建築大学 (SCI-Arc.) 大学院修了

1996～2002年 シーザーベリ アンド アソシエーツ ジャパン勤務

2004年 (株) office EA 設立

2006年～ 日本大学工学部建築学科非常勤講師

平成21年度公務員内定者の報告



及川 美帆（土方研究室 大学院生）
内定先：福島県庁（建築職）
出身校：福島県立安積黎明高等学校
私は、大学入学当初から、公共施設事業やまちづくりに興味を持ち、それらに将来携われたらと思い、公務員を志望していました。そのため、卒業研究もまちづくり研究のできる研究室を志望し、研究を通して得た知識や技術を、住みよいまちづくりに活かせればとも考えていました。また、公務員の内定時期は、一般企業と比べると遅いため、精神的に辛く感じる事が多く、そのような中で、「最後まで挫けない」という信念を持続させることが大切です。その持続方法としては、公務員を目指す仲間をできるだけ多くつくること、そして情報交換や励まし合うことが有効です。初志貫徹及び就活仲間づくりが公務員合格のキーワードです。試してみてください。



小林 真衣（土方研究室 学部生）
進路先：秋田県庁（建築職）
出身校：秋田県立秋田南高等学校
私が公務員を目指したのは、公務員になって地元の景観を良くしたいという気持ちが大きかったからです。卒業研究で景観について研究していること、また、NPO団体と景観の視点から街並みづくりの活動もしていることから、面接試験のときには自分の力で地元の景観を変えたいということを積極的にアピールしました。公務員にも様々な職種があるので、公務員を目指している人はただ漠然と公務員になりたいというだけでなく、公務員になって何がしたいのか具体的などころまで早めに考えておくことをお勧めします。そして、1日のタイムスケジュールを立て、自分に合う生活スタイルで勉強することが大事だと思います。後輩の皆さん、頑張ってください。



添野 祐平（野内研究室 大学院生）
内定先：東京消防庁（建築職）
出身校：私立日本大学東北高等学校
私が公務員を目指したきっかけは、中学生の職業見学で見た消防士の姿に憧れ、消防関係の仕事に就きたいという夢を抱き続けていたからです。働くなら東京消防庁で働きたいと思い、採用について調べると職員の中に建築職があるのを知り、憧れの場所で建築の知識を活かすことができると思い受験を決意しました。建築職員の場合、消防官とは違い災害現場での消防活動は行いませんが、本庁や消防署などの公共建築物の管理業務などを行います。公務員試験は、長期に渡り行われるのでモチベーションを維持し続ける“精神力”，幅広く情報を集める“情報収集力”，なにより「自分はここで働く！」という“強い意志”を持つことが合格への第一歩だと思います。



佐藤 慧介（土方研究室 学部生）
進路先：新潟県庁（建築職）
出身校：新潟県立三条高等学校
両親が公務員ということもあり、2年次生という早い段階から公務員になりたいと思い始め、3年次生の夏にインターンシップに参加し、実際の業務や職場の雰囲気を実体験し、公務員になることを決意しました。試験対策としては、学内にある公務員試験対策講座に参加し、公務員試験を熟知した先生から直接アドバイスを受け、論文添削、面接試験まで懇切丁寧に指導していただきました。CSNaviには専門試験の過去問とその解答・解説が10年以上掲載され、また進路指導室にも多くの過去問が揃っています。工学部には公務員になるための環境が充実しています。それを最大限に生かして公務員試験を乗り切ると良いと思います。



三浦 泉（市岡研究室 大学院生）
内定先：東京都荒川区役所（建築職）
出身校：福島県立田村高等学校
私が東京都特別区を志望した理由は、地方出身者の視点を活かし、日本の中心である東京で仕事がしたいと思ったからです。また、学内の説明会に参加し、人事の方の話を伺ううちに、荒川区に興味を持ちました。今まで縁がなかった荒川区の情報を得るため、東京で受験した帰りに立ち寄り、自分の目で荒川区を見て歩きました。学内の公務員講座を受講し、勉強方法だけでなく面接対策や集団討論においても丁寧な指導を受けました。特に、面接カードの添削や面接対策を受けていく過程で、自分の考えに自信が持てるようになりました。面接対策は、先生や友人と実践することで自分の意見がまとまってくるので、積極的に行うことが大事だと思います。



佐藤 光将（浅里研究室 学部生）
進路先：福島県三春町役場（建築職）
出身校：福島県立田村高等学校
公務員を目指したのは、地元商店街の衰退や少子高齢化など様々な地方小都市の問題に携わり、地域や地元の活性化に貢献したいと考えたからです。私は民間企業の就職活動も行っていたため、公務員試験の勉強との両立は大変でした。ひたすら過去問を解き、公務員対策講座では、試験対策だけでなく論文の添削や面接対策などの様々な情報を得られ大変役に立ちました。公務員が内定するまでに建設設備会社と郵便局株式会社から内定をいただいたため、途中で公務員試験を辞めたくなくなりました。また、科目が多いことや点数が伸びずに大変苦労しました。公務員試験は目標に向かって最後まであきらめないことが大切だと感じました。

構造設計インターンシップ体験報告

「インターンシップ I」の体験を通して実感したこと

大学院博士前期課程 1年 板垣鉄哉

昨年(2019年)の11月28日に改正建築士法が施行され、大学院の就学期間を実務経験として認定されるためには、大学院修了に必要な単位以外に、新たに設けられた「インターンシップ科目」の単位を修得しなければならなくなった。その中でも、学外の設計事務所で180時間以上の就業体験を義務付けた「インターンシップ」が必修科目になった。

そこで今回、夏休み期間中の7月27日から8月21日までの約4週間、濱尾博文先生が監理建築士を務められるエーユーエム構造設計事務所において構造設計の実務体験をさせて頂いた。

本稿では、今回のインターンシップを通して学んだことについて報告する。

「インターンシップについて」

インターンシップでは、写真1に示す農業高校収納調整室の耐震診断補助をさせて頂いた。耐震診断とは、大地震発生時に倒壊させないため、建物に十分な耐震性能があるかを調査検討するもので、耐震補強する際の基礎的な資料となる。

耐震診断を行う過程で、最初の業務は現地調査であった。調査では主にブレース接合部や柱はり接合部などの接合部分に重点を置き、実測調査を行った(写真2)。また、同時に建物が設計図書通りに施工されているかを調査したが、設計図書どおりに施工されていない部分が多く見られた。例えば設計図書に、記載されている棟部の補強プレートが無い場合や、柱はり接合部に使用されている高力ボルトの種類が異なる場合などの不一致が数多く存在し、構造詳細図をもう一度書き直しをしなければならなかった。

次に現場調査で得られたデータを参考にして、柱脚詳細図、パネルゾーン詳細図などの構造詳細図をCADで作図していくのだが、この作業を通じて改めてAutoCadの重要性が実感できた。私は今まで、AutoCadを一度も操作したことがないため、図面を書く際には多くの時間を費やした。この時、学部2年次に開講されている「建築情報処理演習Ⅳ」を履修しておけば良かったと後悔した。もし、将来的に設計事務所やゼネコンで活躍したいと考えている人がいるならば、是非一度はAutoCadを使って図面を書いてみることをお勧めする。

最後は、構造計算ソフトを用いて、建物の耐震性能の指標となるIs値を算出した。このソフトは、建物の形状、柱はり断面などの必要な値を入力すると、建物の耐震性能が計算されるソフトであるが、コンピュータから出力されたデータを必ず人間が確認しなければならない。この確認には多くの経験を積んだ人でなければ全体像を把握した上で、結果の正確さを判断することが難しいと分かり、自分の経験不足を痛感した。

「インターンシップを体験して」

社会に出ると大学で得た知識は役に立たないという言葉をよく耳にするが、今回のインターンシップに参加して、大学で学ぶ学問は決して無駄ではないことが分かった。何故ならば、部材耐力を求めるために、応用力学で学んだ平行軸の定理や、構造設計工学特論や卒業研究で学んだ知識などが、実際に使われていたからである。

現在学校などの公共施設では、耐震診断・耐震補強が数多く実施されているが、耐震診断・耐震補強は非常に多くの時間と労力を費やすとともに、高度な専門知識を有する人でなければできない仕事であることが理解できた。また、学外インターンシップは、今まで大学で学んだことを実践する良い機会であったと同時に、今まで以上に勉学に励み、より多くの専門知識を身につけなければ社会では通用しないことが確認できた場でもあった。

今回の法改正により、大学院の就学期間が1年間の実務経験にしかならないことは残念だが、私自身大学院で学んでみて、学部時代と比較して高度な専門知識を得ることができている。是非皆さんも大学院に進学して、大学院の2年間で真剣に自分を見つめ直す時間にしてはどうか。



写真1 農業高校収納調整室



写真2 現地調査の様子

「謝辞」

インターンシップの期間中は濱尾博文先生をはじめ、エーユーエム構造設計事務所の皆様には大変お世話になりました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

スタンフォード大学からの便り 第2便：カルフォルニアライフ！

博士後期課程 3年 鈴木 裕 介

留学生活も約半分が経過しました。カリフォルニア州も夏が過ぎ、幾分涼しくなってきた今日この頃です。さて、今回は、カリフォルニア州での生活や環境およびスタンフォード大学での研究について報告させていただきます。

カリフォルニア州に約半年間過ごしておりますが、こちらは日本の気候と比べて、とても過ごしやすい環境を持った地域です。冬季以外は、雨はまったく降らず（生活用水は、ヨセミテ国立公園などから引いているようです）、毎日が晴天といった状況です。私は、約30～40分費やし自転車で通学しているため（写真1）、このような気候のおかげで毎日快適に通うことができます。

留学する以前から不安を感じていた食事についてですが、こちらでも日本食が多数販売しているため、主に自炊を行って過ごしております。また、和食レストラン（写真2）も多数点在しているため、食べ物における恋しさはまったく感じておりません。生活用品についても、現在住んでいる家の近くに、郡山のイオンタウンのような大きなショッピングセンターもあり、日本で販売しているものも容易に手に入れることが可能です。

次に、こちらでの娯楽についてですが、Blume Center（筆者が所属する施設）でともに学んでいる学生らとキャンパス内のスポーツ施設を利用すること、気分転換に近隣のダウントウンに出かけることなどで楽しんでいます。中でも、観光地としても有名であるサンフランシスコのダウントウンは、アメリカ国内でも非常に大きな都市です（写真3・4）。大きな都市でありながら、人口密度はそれほど高くないため、感想としましては、日本国内の大都市と比較して穏やかな賑わいを見せているといった印象です。

続いてスタンフォードでの研究などについて簡単にお話いたします。私は、日本では鉄筋コンクリート構造についての破壊実験や簡易的な数値計算を中心とした研究を行ってきました。現在こちらでは、より詳しい数値計算を日々行っている状況です。そのため、所属するBlume Center内の学生と直接的に共同で研究を行うといったよりも、パソコンに黙々と向かう時間が多い状況です。こちらの学生たちもまた、自分たちの行うべき研究内容を自ら考え、学び、それらについて指導教員の方にアドバイスを頂きながらそれぞれの研究を進めているようです。学生同士では、ある時期に発表会などが開かれ、みな積極的に参加し、その中で意見を交換し合うなどの形が取られています。

研究以外につきましては、英語力向上に励んでいます。アメリカでは、私のような主に研究を目的とした留学生に対して生活に必要なとされる英語力を学ばせるため、無料で通える学校が配備されています。こちらでは、Writing, Listening, ReadingおよびSpeakingまで様々な形で英語を勉強することが可能です。

海外へ留学することは、研究しかり遊びしかり生活しているだけで日々勉強になるものと実感しております。人から聞くことと体感することでは大きく異なります。一般社会に出る前に、これまでにない物事を経験することは、これからの人生にとって大きなプラスになると強く体感しています。みなさんにも海外派遣奨学制度を活用し、海外留学を志すことをお勧めいたします。

今回は、約一年間を総括して留学生活で学んだことなどについてお話しできればと考えております。



写真1：通学中の様子



写真2：和風レストランの様子



写真3：ユニオン・スクエア



写真4：AT&Tパーク

第13回 J I A 東北建築学生賞受賞報告

日本建築家協会（J I A）東北支部主催「東北建築学生賞」は、東北にある大学における授業の課題作品を応募作品対象として毎年開催されており、今年度は第13回目の開催となる。本学科からも毎年3作品応募しており、4年次生の応募作品については「建築設計」授業の最終日に、各設計担当教員から推薦された作品のプレゼンテーションを実施した上で決定している。応募作品に決定した学生3名は、夏休みを返上して課題図面をA1判1枚のプレゼンテーション図面として作成し直すと同時に、本番に向けて質疑応答の対策も練って臨んでいる。

今年度「第13回東北建築学生賞」は10月17日(土)にせんだいメディアテークにて開催され、本学科から応募した3作品が次の通りいずれも優秀な評価を得た。

2年続けて応募するチャンスを得た早川真介君（4年次生）は、郡山市公民館と一体になった市民プラザの設計という上西明非常勤講師の課題において、公民館と新たに提案する建築物を含む様々なシーンが、常に歴史性と新規性が融合する空間となることを意識した市民プラザを提案し、優秀賞を受賞した(図1)。昨年度の最優秀賞受賞に続き、2年連続の受賞という快挙を成し遂げた。昨年度の受賞がまぐれではないことが証明でき非常に嬉しいと、この結果を非常に喜んでいた。

永井亮君（4年次生）は、フィールドを活かした新たな複合建築の提案という渡部和生非常勤講師の課題において、小学校と図書館の2施設を、複合と合築の間に定義する「複合築」建築として提案した(図2)。残念ながら受賞は逃したものの最終選考10作品に残る評価を得ることができ、プレゼンテーション図面としてまとめる努力が報われたと、満足感を味わっていた。

アーキテクトコースに所属する松井岬さん(3年次生)は、地方都市の中心市街地における新しいミュージアムの提案という課題において、狩野教授・松井准教授・渡辺宏非常勤講師の3名による指導を受け、郡山の基盤を築いた竹林業の復興を目指した「竹のミュージアム」を提案し、特別賞を受賞した(図3)。「今後の励みになりました。来年も頑張ります。」と決意を新たにしていた。

(編集係記)



写真左：建築設計プレゼンテーションの風景



写真右：受賞結果後の喜びの表情



図1 早川真介君（4年次生）の作品
「大切な歴史を日常の風景へー公会堂と市民プラザー」



図2 永井亮君（4年次生）の作品
「複合築ー教育を見守る図書・図書を利用する教育ー」



図3 松井岬さん（3年次生）の作品
「無限 竹採物語ー産業再生をめざしてー」

郡山開成山野球場改修工事現場見学会

10月26日(月)に、建築施工Ⅱを受講している学生を中心とした現場見学会を開催した。台風が日本列島の東海上を北上したため、時間が経つにつれ風雨が強まるあいにくの天候ではあったが、50名弱の参加学生は傘をさし足元が悪いながらも、机上での話ではイメージしがたいスケールの現場の姿を目の当たりにし、現場所長の丁寧な説明に耳を傾けながら熱心に見学していた。

既に打設していたRC造スタンド部分の下で、その荷重を支える支保工が林立する中を歩いたり、鉄骨建方を行うために組んだ足場の説明を受けたりと、完成後に目にする部分だけではなく、建設過程でのみ作られ完成後は消えてなくなる、施工現場におけるもの造りの実態に関する説明を受け、多くの工程を経て建物が完成する建設プロセスへの理解を深める機会となった。

現場見学会後に行われた質疑応答では、鉄骨の溶接方法や外装のアルミパネルについてなど、学生から積極的な質問があり、模型やパースを使いながら具体的な解説を受けた。最後に現場所長から、施工管理職のやりがいについて何うこともでき、これから本格化する就職活動に向けて良い刺激となったことであろう。(編集係記)



新任の先生

非常勤講師 石井 久 克

担当科目：建築計画設計特別実習
(大学院)



本年4月より非常勤講師でお世話になっております。当事務所は、確実なチームプレーとコラボレーションを目標に掲げる設計集団です。事務所としての重点業務、基本的な姿勢を紹介します。

■医療介護施設／中小規模の医療介護施設設計実績をベースに、変革の必要性が問われているこの分野で、医療と介護のコンプレックスの提案、または運営等まで含めたコンサルティングを行っています。医療介護事業推進研究室を建築以外のスペシャリストを抱えスタートしました。私どもの提案が地域医療の形成に少しでも役に立てばと考えております。

■商業施設／近年コンパクトシティ構想が提唱されるなかで、大型小売店舗が中心市街地へ向うと同時に、地域との有機的なつながりを求めるケースが見られるようになりました。医療介護施設・医法42条施設等と商業施設の複合化の提案を積極的に行っています。

■コンペへの参加、耐震診断・耐震補強設計等を積極的に行っています。

建築または建築を超えたフィールドでのチームプレー、コラボレーションを通じ新しいものさし、価値を見いだし、社会に貢献したいと考えています。以上私どもの試みをダイレクトに紹介、または一緒に体験して頂くことが私に課せられた役割と心得、全力投球したいと考えております。

第56回日本大学全国高等学校・建築設計競技開催報告（幹事校：工学部）

去る11月7日(土)に理工学部駿河台校舎に於いて、第56回日本大学全国高等学校・建築設計競技の第一部門（作品）の上位6作品（優秀賞）を制作した高校生による公開発表会及び第2次（最終）審査会が行われた。その結果、最優秀賞1作品、審査員特別賞1作品、審査員長賞1作品が選出された（他の3作品は優秀賞）。入賞作品はどれも力作で甲乙つけ難く、審査会の議論が白熱した一つの表れとして、予定外の「審査員長賞」が設けられた。

今回の設計競技は、工学部が幹事校・事務局担当ということで本学部が研究・教育活動の柱にしている「ロハス」からテーマを「ロハスな家 人と地球にやさしい住まい」と設定した。また、設計競技の審査員長は出村克宣学部長にお願いした。応募作品数は、テーマに対する関心の高さも相俟ってか、第一部門166点（校数：50校）・第二部門16点（校数：6校）と多数に及んだ。応募作品は全体的に質が高く発想豊かな作品・論文が多かつ



公開発表会の風景

た。各高校の指導の先生の高い教育力もあり、建築と社会を見る切り口・論理的な思考力・迫力あるドローイング・上手いオーラルプレゼンテーションなど、高校生のトップレベルの実力には毎回驚かされる。

表彰式後の交流会における高校生との談話からは、建築に真摯に取り組む熱い思いが伝わってくる。この設計競技は、前向きな姿勢や建築に対する興味を持続させたまま1人でも多くの学生を社会に送り出さねばならないという大学の使命を確認する機会の場合となっていることが、各学部の建築系学科が協力し合いながら半世紀以上取り組んでいる理由なのかも知れない、とふと思った。

文責：浦部（当該コンペ工学部幹事、事務局担当）



交流会での集合写真

第52回日本大学工学部学術研究報告会〈建築学部会〉

開催日：平成21年12月5日（土）

＜第1会場：7033教室＞

- ・既成市街地における防犯環境設計に関する研究　ーその6. 通学路における犯罪不安と空間特性ー
○及川美帆, 土方吉雄, 三浦金作
- ・アーケードのある街路の空間特性に関する研究　ー来街者の歩行経路と行動パターンについてー
○高木彰, 三浦金作, 土方吉雄
- ・仙台市中心市街地の地区構造に関する研究　ーアーケード沿い建築物の施設用途構成についてー
○岡野健太郎, 三浦金作, 土方吉雄
- ・小学校における児童の行動からみた学校建築の空間特性
○三浦泉, 市岡綾子
- ・階段デザインの評価に関する研究　ーコンピュータグラフィックスを利用した評価実験ー
○元田草太, 浦部智義, 三浦金作
- ・総合病院に勤務する医師を対象とした意識調査　ー病院建築の計画要件に関する研究ー
○太田亮平, 浦部智義, 三浦金作
- ・劇場・ホール公演時の施設内のオープンスペースに関する研究
ー公演時外にホワイエを開放している公立文化施設を例としてー
○渡邊洋一, 浦部智義, 三浦金作
- ・大規模劇場・ホール施設のサイン計画に関する研究　ー外国の公演団体の来日公演を想定した施設の調査研究ー
○三瓶宣子, 浦部智義, 三浦金作, 高木義典
- ・個別要素法による歩行者の動線シミュレーション手法に関する基礎的研究
ー正方形空間に設定した複数目標点を回る歩行者の動線シミュレーションー
○添野祐平, 倉田光春, 野内英治
- ・ゴムボールを衝撃源とした床衝撃音遮断性能の評価方法に関する研究
○濱田幸雄
- ・断面形状から見たボイドスラブの床衝撃音遮断性能に関する研究
○藤田怜, 濱田幸雄
- ・住居併用型「民宿」の生活実態に関する一考察　ー福島県南会津郡旧館岩村に立地する民宿についてー
○星ルミ子, 若井正一
- ・ペルーにおける学校教育制度と学校建築に関する一考察　ーリマ市内のサンペドロ学校の建築設計についてー
○五島デニセ, 若井正一

＜第2会場：7034教室＞

- ・せん断遅れを考慮した梁の一般解について
○倉田光春
- ・マトリックス法による動的構造解析法に関する研究
○杉山和隆, 倉田光春, Buntara S.GAN, 野内英治
- ・アルミ管を用いた単層ラチスドーム模型の局部座屈性状に関する実験的研究
ーその3 単層ラチスドーム模型の頂部単調載荷実験ー
○福田大介, 和田成就, 倉田光春, 野内英治
- ・アルミ管を用いた単層ラチスドーム模型の局部座屈性状に関する実験的研究
ーその4 単層ラチスドーム模型の弾塑性解析ー
○和田成就, 福田大介, 倉田光春, 野内英治
- ・日本大学工学部16号館における耐震補強効果の検討
○石橋慧人, 千葉正裕, 浅里和茂, 日比野巧
- ・既存鉄骨造建築物の柱はり接合部耐力評価に関する研究
○板垣鉄哉, 浅里和茂, 千葉正裕, 日比野巧
- ・鋼構造建築物における柱脚部耐力の検討
○浅里和茂, 板垣鉄哉, 千葉正裕, 日比野巧
- ・水中及び温水養生したビニロン繊維補強ポラスコンクリートの力学的性質
○齋藤俊克, 有岡大輔, 出村克宣
- ・ビニロン繊維補強ポラスコンクリートのポアソン比
○有岡大輔, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・仕上材を含む再生粗骨材を使用したコンクリートの性質　ー材齢5年の圧縮強度及び静弾性係数ー
○柳啓 (財団法人建材試験センター), 笠井芳夫
- ・ポリマーセメント系接着剤を用いたCF Strand Sheet補強RC梁の曲げ弾性設計に関する一考察
○岸哲也, Sanjay PAREEK
- ・鋼製永久型枠を用いたRC造梁部材の曲げ・せん断挙動に関する考察
○寺田健一郎, Sanjay PAREEK
- ・ネットワークを用いたモルタルの自己修復機能による強度の発現に関する基礎的研究
○熊田廣樹, Sanjay PAREEK

学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

- ・寒河江賢伍, 出村克宣, 草野仁司; 「亜鉛スラグを使用したセメントモルタル及びコンクリートの基礎的性質」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 31, No. 1, pp. 175-180, July 2009. (コンクリート工学年次大会2009)
- ・齋藤俊克, 有岡大輔, 出村克宣; 「ビニロン繊維補強ポーラスコンクリートの力学的性質に及ぼす繊維長さ及び粗骨材最大寸法の影響」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 31, No. 1, pp. 1711-1716, July 2009. (コンクリート工学年次大会2009)
- ・有岡大輔, 齋藤俊克, 出村克宣; 「ビニロン及びポリプロピレン繊維補強ポーラスコンクリートの力学的性質」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 31, No. 1, pp. 1717-1722, July 2009. (コンクリート工学年次大会2009)
- ・藤井知明, 出村克宣, 橋本純; 「ひび割れ供試体を用いた無機系表面含浸材の透水に対する抵抗性評価」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 31, No. 1, pp. 1957-1962, July 2009. (コンクリート工学年次大会2009)
- ・寺田健一郎, Sanjay PAREEK; 「鋼製永久型枠を用いたRC梁部材の曲げ耐力に関する基礎的研究」, 日本大学工学部紀要, 第51巻, 第1号, pp. 5-10, Sep. 2009.
- ・飯田裕樹, 若井正一; 「新潟県中越沖地震における住宅被災調査報告 第1報 柏崎市東本町の住宅被災と仮設住宅の居住実態」, 日本大学工学部紀要, 第51巻, 第1号, pp. 11-22, Sep. 2009.

学 会 発 表

* 届け出があった記事を掲載

- 2009年日本建築学会大会 日時: 平成21年8月26日~29日 会場: 東北学院大学泉キャンパス
- ・ビニロン繊維補強ポーラスコンクリートの圧縮性能 ○有岡大輔, 齋藤俊克, 出村克宣
 - ・曲げ強度の自己修復機能を有するモルタルに関する基礎的研究 ○熊田廣樹, Sanjay PAREEK
 - ・総合病院に勤務する医師を対象とした意識調査 - 病院建築の計画要件に関する研究 (その1) - ○太田亮平, 浦部智義, 上野佳奈子, 中山誠健
 - ・オープンスペースをもつ小学校における遊び行動と空間特性 - 福島県内の小学校におけるケーススタディー ○三浦泉, 市岡綾子, 若井正一
 - ・移動に伴う印象的なシーンの定量化分析 - 建築空間における階段・スロープの研究 (その8) - ○須賀陸 (東京電機大), 積田洋, 浦部智義, 中山誠健, 元田草太
 - ・印象度評価法による分析 - 建築空間における階段・スロープの研究 (その9) - ○中山誠健 (東京電機大), 積田洋, 浦部智義, 須賀陸, 元田草太
 - ・写真と実空間での印象評価の相関分析 - 建築空間における階段・スロープの研究 (その10) - ○元田草太, 浦部智義, 積田洋, 中山誠健, 須賀陸
 - ・脳血管疾患患者における住宅改造・改修に関する研究 - 残存能力による自立度からみた住宅改造・改修傾向 - ○佐藤由紀乃 (日本女子大), 松井壽則, 佐藤克志
 - ・メディア情報の差異による経路探索行動に関する研究 - その1. 探索歩行時の経路選択と空間把握について - ○金子光義, 三浦金作, 土方吉雄, 後藤司
 - ・アーケードのある街路の空間特性に関する研究 - その3. 歩行時の空間認知について - ○千葉将隆 (大林組), 三浦金作, 土方吉雄, 高木彰, 岡野健太郎, 佐藤壮
 - ・アーケードのある街路の空間特性に関する研究 - その4. 行動誘発装置の設置状況について - ○高木彰, 三浦金作, 土方吉雄, 千葉将隆, 佐藤壮, 岡野健太郎
 - ・既成市街地における防犯環境設計に関する研究 - その5. 児童通学路における犯罪不安と閉鎖性について - ○及川美帆, 土方吉雄, 三浦金作
 - ・ねじ込み接合によるアルミ単層ラチスドームモデルの座屈性状に関する実験的研究 ○福田大介, 倉田光春, 野内英治
 - ・細長い平面形を有する建物の立体振動性状 - その6 3つの建物による比較 - ○日比野巧, 千葉正裕, 浅里和茂
 - ・鋼製永久型枠を用いたRC梁部材の力学特性に関する実験 ○寺田健一郎, 鈴木裕介, Sanjay PAREEK
 - ・ポリマーセメント系接着剤を用いたCF Strand Sheet補強RC梁の曲げ弾性設計に関する一考察 ○岸哲也, 鈴木裕介, Sanjay PAREEK
 - ・重量床衝撃音の最大A特性音圧レベルと各種心理量の対応に関する主観評価実験 ○濱田幸雄, 井上勝夫, 平光厚雄, 漆戸幸雄
 - ・ゴムボールを衝撃音とした場合の最大A特性床衝撃音レベルによる性能基準作成の考え方 ○中澤真司 (鉄建建設), 平松友孝, 濱田幸雄, 河原塚透, 矢入幹記

■狩野教授は、4月1日、福島県より福島県文化財保護審議委員を委嘱された。

■齋藤助手は、7月1日、日本コンクリート工学協会より、「残コン・戻りコンの発生抑制及び有効利用に関する技術検討委員会」の委員を委嘱された。

■三浦教授、土方准教授、市岡講師は、7月11日、福島県より福島県景観アドバイザーを再度委嘱された。

■土方准教授は、7月15日、郡山市より郡山市協働のまちづくり市民会議委員を委嘱され、副会長に選出された。

■土方准教授は、7月24日、喜多方市より、喜多方市都市計画審議会委員・会長に再任された。

■土方准教授は、7月27日、郡山市より郡山市商業振興計画策定委員を委嘱された。

■浅里教授は、8月4日、福島県より土木部専門研修の講師を依頼され、「耐震設計概論」と題して講話された。

■土方准教授は、8月6日、福島県より土木部専門研修の講師を依頼され、「都市のあり方と都市政策」と題して講話された。

■狩野教授は、8月21日、福島県建築設計協同組合より会津美里町本郷地域統合小学校整備公募型プロポーザルの審査委員長を委嘱された。また、近藤道男非常勤講師が委員を委嘱された。

■狩野教授は、8月24日、宮古市より崎山貝塚縄文の森公園第I期整備基本設計業務委託業者選定プロポーザルの審査委員を委嘱された。

■濱田教授は、8月30日、フォレスト仙台にて開催された、日本建築学会大会関連行事 住まいづくり市民セミナー@仙台「安心して長く住み続けられる住まいとは？」において、「住まい方で決まる集合住宅の音環境」と題して講演された。また、浅里教授が司会を、市岡講師が企画・運営を担当された。

■狩野教授は、9月1日、平成21年度郡山市特別・自治功労表彰式において、郡山市文化財保護審議会委員として文化の振興に寄与された功績をたたえる自治功労表彰を受けられた。

■濱田教授は、9月9日、福島県より「ふくしまの棟梁コンクール」審査委員を委嘱された。

査委員を委嘱された。

■9月15日～17日の3日間、本学部で開催された日本音響学会2009年秋季研究発表会で、濱田教授が実行委員を務めた。

■10月17日、せんだいメディアテークで開催された日本建築家協会（JIA）主催第13回東北建築学生賞で、15校16学科応募総数38作品中、早川真介君（4年生・浦部研）の作品「大切な歴史を日常の風景へー公会堂と市民プラザー」が優秀賞、松井岬さん（3年生）の作品「無限 竹採物語ー産業再生をめざしてー」が特別賞を受賞された。永井亮君（4年生・浦部研）の作品「複合築ー教育を見守る図書・図書を利用する教育ー」も最終選考の10作品に残る結果であった。＊詳細はp. 8を参照のこと。

教室ニュース

■10月17日、せんだいメディアテークで開催された日本建築家協会（JIA）主催卒業設計コンクール東北支部で、7校の応募作品中、院生の志村岳洋君（指導：松井壽則准教授）の作品『「ちょっとそこまで。」』が選拔され、11月14日に新宿アイランドタワーで開催されたJIA全国学生卒業設計コンクール2009公開審査・展示会に出品された。

■10月19日、福島県内16の大学・短大・高専で構成する福島県高等教育協議会は、戦略的連携支援事業の「エリアキャンパス・プログラム」の1つとして「住環境創生大学校 須賀川」（担当：狩野教授、市岡講師）をスタートさせた。本学と須賀川市、須賀川商工会議所が共催を決定した。



（右：橋本克也須賀川市長，中央：出村克宜日本大学工学部長，左：関根郁夫須賀川商工会議所会頭）

■10月25日、金沢学院大学で開催された日本インテリア学会第16回卒業設計展で27校応募総数30作品中、卒業生の美濃孝君（指導：土方吉雄准教授）の作品「にじむ生活／生まれる家族」が優秀作品賞を受賞された。10月28日～11月7日にタチカワ銀座スペースAtteで、11月11～13日に東京ビッグサイトで開催された巡回展に出品された。

■土方准教授は、10月27日、海峽メッセ下関（山口県）で開催された第56回全国建築審査会長会議において、建築行政への業績に対する表彰状を授与された。

■土方准教授、市岡講師は、11月12日、郡山市より「郡山市景観まちづくり賞」選考委員会の委員を委嘱され、土方准教授は委員長に選出された。

■11月14日、新宿パークタワー Living Design Center OZONEで開催されたJACS全国学生建築コンソーシアム2009

「50年住宅デザイン～50年後の未来にも支持されるデザイン～」で、応募総数367件のうち、石賀悠也君（4年生・浦部研）の作品が、1次審査通過30作品中、優秀賞に選出された（下：模型写真）。詳細は本コンペのHPを参照のこと。

<http://www.jacs.cc/moushikomi/index.html>



■土方准教授は、11月16日、郡山市より郡山市公共事業評価委員会委員に再任された。

■出村教授は、11月23日、東京アメリカンクラブ（東京都）で開催された有限責任中間法人環境マテリアル推進協議会10周年記念大会＆同協議会全国大会において、「ロハスの工学」と題し、基調講演された。

■人事：本学科に永年勤務されご活躍された八町雅康講師が、8月4日退官された。